



TITLE:

観測案内(4月)

AUTHOR(S):

木邊

---

CITATION:

木邊. 観測案内(4月). 天界 1937, 17(192): 244-245

ISSUE DATE:

1937-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167438>

RIGHT:

## 観 測 案 内 (4月)

### 木 邊 生

4月 春や春、花と春とは4月がクライマックスだ。然し、“4月の星空”と云つては、一應首を捻つて見ないと頭に浮ばない。どうもピンと来ない語句である。が、世は春だ。勿論花と酒に、ビツコか何かは知らないが、インフレ景氣を謳歌するのも、星好きには少々俗っぽいが、……………

天候、シーイング 冬の大陸高氣壓が、ウンと弱くなつて、本邦の周囲には何處と云つて目星しい高壓部が無くなる。だから低氣壓が大陸に出来て東進



上弦 (月齢 7.8日) 去1月20日の夜

——愛知 早川弘氏撮影——

10種反射赤道儀(手働式)  
絞り6種、F 94種  
20ミリ、ハイゲンアイピリス  
アグファ・イゾクローム乾板、露出1秒

し、去れば次には高氣壓、又低氣壓と、案外正しく數回繰りかへす。統計上、是れが約6日の周期だと云はれても居る。斯くする内に、年によつては月始めは相當寒いが、月末には樺太、北海道まで根雪が消え、氣の早いカンカン帽が泳ぐ程の日すらも現れる。北支や滿洲では、内地以上の高温に昇る日があるそうだ。そして、大抵月末か5月初旬に、冬中頑張り通した高氣壓が、大陸から太陽の輻射に追ひ出されて、暫く本邦上を蔽ふ。例年此の頃に10日許り好晴が続く。是が過ぎれば、氣壓がオホ1ツク海方面に高くなり、もうソロソロ梅雨期地帯が次第に北上して来る。シーイングは、附近に強い低氣壓がない時には、非常によく、平均して1年中4—5月が最良かも知れない。但し、空は冴へない。

**太陽** 本年の初頭異常な數値を示した相對數は、やや反動的に減少しそうな氣がする。もう朝早く昇るから、7—8時が觀測の好機だらう。

**火星** 長く西天に人目を引いた金星も、利鎌の様な姿を太陽に向けて暮進する。月初めに52''角の姿を僅かに見る事は出来ても、多分得る所もないだらう。其れに反して、火星が愈々王座に近づく。視直徑は 12.''08—16.''16迄増加する。8月の下旬に相當する火星は、今、アンタリウムやカシウスに代表される北半球の天下だ。多分 5cm 位に70—80倍の器械で、此の模様や、大シルチスが見えるだらう。2月の觀測に依れば、果して北極冠は小さく、ヘラスが南極冠に紛ふ程白く輝いて居る。望遠鏡を持つ人は、火星だけは斷じて見逃してはならない。

**木星** もう曉天に高い。昨年來持ち越しの大赤斑の消長が見ものだらう。

**恒星界** 一體に淋しい。アクトウルスが東天に登る。光度は +0.24 等だが(ハートビートの測定)、僕のように、赤色には感じ易い目を持つた者には、ヴェガやカペラよりもこの星の方が明るい目に感ずる。恒星の變光觀測をする仲間では、星の色に依つて、この系統的な誤差が出来る。嚴密な意味に於て、總ての人は輕微な色弱かも知れない。一度試して見る事である。

暫くの見おさめだと思つて、西天低いオリオン、アンドロメダの星霧、ペルセウスの二重星團に筒先を向けて見たい。

昨年 <sup>の</sup> 記録	平均雲量	6h 7.0	21h 7.0
	平均氣溫	6h 6.4°C	21h 8.9°C
	太陽黑點相對數1日平均	92.2	觀測日數 16日

### 花山天文臺の參觀中止

從來一般に公開してゐた花山天文臺は、今般日食觀測隊派遣並に生駒山天文臺創設等にて、多忙且つ臺員少數のため、今後晝間夜間共一切參觀は中止される事となつた。